

Ça va? 悲しみのヴェニス Junko Higasa

私はかつて K 先生の夏目漱石『虞美人草』の講義を受けた。その恩恵の一つは、漱石文学と英文学の繋がりが見えてきたことだ。それは某社 C.M.ではないが、いろいろな場面で「メチャクチャつながっている」 シャンソンとは関係ないと思うでしょう。でも私の頭の中では、その後、独自に読んだ漱石作『三四郎』—漱石が好んだ画家ターナー—ターナーが好んだ詩人バイロン—シャルル・アズナヴァールが歌う『悲しみのヴェニス』とつながったのだ。そのような繋がりが見つかるのは、優れた文学・美術・音楽は、常に社会を反映しているからだ。だから藝術は面白い。

今まで、私は『悲しみのヴェニス』を「恋人たちの別れの歌」として聴いていた。けれど、バイロンの詩『貴公子ハロルドの巡礼の旅 (Childe Harold's Pilgrimage) 』に触れた時、ふとアズナヴァールとアルメニアの関係を思い出した。歌の詩はフランソワーズ・ドリネ(Françoise Dorin)との合作のようだが、私の中で、そこに男女の恋愛以外に、ヴェニス自体の哀しい運命が重なった。それを促したのはバイロンの詩の以下の部分である。(出来るだけ行ごとに訳したので、堅苦しいのはご容赦)

ヴェニスに立った 嘆きの橋の上に
かたや宮殿 かたや牢獄
私は見た そのうねりが海から立ち昇るのを
魔法の杖の一振りもたらしたように
千年広がる憂鬱な翼が
私を包み 栄光の微笑みは消えかかる
遙か昔多くの支配地は
翼のあるライオンの大理石群を仰いだ
威厳あるヴェニスはいずこ 幾多の島の玉座は！

配偶者なきアドリアは主を嘆く
例年の結婚はもう繰り返さない
ブチェンタウロ(元首が乗るガレー船)の再建はなく
ほったらかしにされた やもめの上衣！
今でもサンマルコは彼の固守したライオンを見て
佇んでいる ただ衰えた力の空しさの中に
皇帝が求めた栄誉ある支配場所に
君主がじっと眺めた 当世の羨望の的
ヴェニスに比類なき天賦を持つ女王だった

フランス語は人間以外に
「彼・彼女」という代名詞を使うが、英語も同じ。ヴェニスは「彼女」と表される。華やかで美しく全盛を極めたアドリア海の女王。ヴェニスと、相性の良い元首とは、仲のよいカップルのよう。でも栄華が去った後のヴェニスは、恋人を失ったときのように、何と寂しげなのだろう。それはアズナヴァールの歌の「恋の夢が破れた時のヴェニスは何て悲しいのだろう」に重なる。アズナヴァールは歌う。恋が終わった時、やり直すための言葉を探してみても、憂鬱な気分がそれを運び去ってしまう。泣くことすらできない。

ふたりの間にあるのは気まずい沈黙だけ。船中の恋人たちを守っているかのようなゴンドラ漕ぎの歌は、別れる二人の寂しさを、なお一層かき立てる。手を差し伸べても、握り返す手もない月明かりの中の沈黙。再び愛し合うことのできない二人にとって、美しい宝を飾った博物館も、栄えた教会の建築も、何の意味もない。二人の目に映るのは憂鬱の翼。国も人も華やかかなりしときは幸せ。花の終わりは悲しい。(2014.6.10)

Ça va, merci. Et toi?